慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	
Title	小泉仰著 ミル
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.1 (1965. 1) ,p.80(80)- 81(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19650101-0080
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650101-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「大恐慌の研究」 生誕の必然性、 諸研究に待たねばならないであろうが、 うに解決・収斂してみせるかは、なお今後の それ自体極めて正しい両視角からす 果をあげているのであるが、編著者自身、 別構造分析の視角であるといえよう。したが 他の公益事業といった二〇年代及び大恐慌に車、建築業、鉄鋼業及び農業並びに電力その 規模の恐慌となっ」た(四〇頁)という国際 金融的機能分析視角と構造分析視角という、 からすれば、「問題の解決に 到達する 以前の 白されているように、編著者の前記問題意識 主要産業の構造分析という点でもすぐれた成 の減退と停止とを衝撃の契機として、世界的 リカに端を発した恐慌が、 られたこの前提条件があったからこそ、アメ 界資本主義が 再編成され、 ためには、なお、もう一つ、 いて主要な役割を演じた産業諸部門の部門 **ームの構造、金融政策及び国際収支関係の** といった金融機能的分析視角と、 そのアメリカ国内的現象としての株式 単に恐慌研究にとどまらず、アメリカ ト」を 通じて、「相対的安定」期の世 問題の提起をなしたにすぎない」。 世界資本主義の体制的危機の が提起された。問題をどのよ アメリカ対外投資 「二〇年代につく 社会主義体制 るこの 自動 それ 告

> 新鮮な 学問的財産を 提供した ものと いえよ 後にわたるアメリカ資本主義経済について、 求することによって、 の達成に必要な独立の諸テーマをそれぞれ追 視角が不可欠であるように思われる。 八〇〇円) ともあれ、同一の研究目標のもとに、目標 (東京大学出版会・A5・五五八頁・一 両大戦間およびその前

小泉

₹ 3 ル

たものである。 これは「世界思想家全書」の一冊で、 ルの思想を、 倫理学の立場から解明し

(第一章、 をなげかけ、 の規準として ら再検討し、それによって、われわれが行動 を点描、彼の倫理学を、メタ倫理学の立場か 先ず著者は、 客観的な態度をとるこ 現代倫理学界の問題の所在を示 いる素朴な功利主義に反省の光 ミルの生涯についてその思想 とを期待する。

義から出発し、 快楽を量と質の双方から考え、 いうまでもなくミルは、 しかもベンサムとは異って、 ベンサムの功利主 満足した豚よ

> もつとこれを擁護している。 観(功利原理)を弁護する理由を提出するこちかわれ育てられ確信の域にまで達した人生 その証明はミルの人生経験全体をとおしてつ の倫理学体系) とであり、 は弁護士の弁論と同じく不完全ではあるが、 はこの功利主義の説明について、 りは不満足なソクラテスの方を撰んだ。 人々の理性に訴える点で合理性を (第二章 ミルの証明 著者

その内容を追うと

等を区別した。これに対し、 社会的功利性を考え、正当な平等と不当な平 原理は外にある結果(extrinsic consequences)、 が認められ、外にある結果の価値しか認めら るための、平等の原理について、シルは平等 れなかった平等よりは、一段と高く評価さ という、内にある結果(intrinsic consequences) 知性活動に関する限りそのものに価値がある 現実の社会制度や規則に功利主義を適用す (第三章、平等と自由) 自由の原理には 0)

熟練労働者には参政権や企業参加を認めつつ べ、彼らの知的・道徳的改善を望んだ。そして彼は労働者階級が一般にうそつきであると述 このような功利主義が具体的問題に適用さ 未熟練労働者は雇用労働者の地位を ミルの姿勢はさらに明らかとなる。

功利原理の適用) きる素質をもつものだけであった。 学、科学、芸術において優れた能力を発揮で ら解放させたいと 望ん だ 女性は、 統や慣習に見ながらも、 彼女らがしいたげられている原因を社会の伝 数投票制を提案した。また女性についても、 を期待しつつも多数者の支配を危険とし、 るだけとした。 また選挙について、 ミルが男性の支配か おもに哲 民主主義 複

論理の次元で見るだけではなく、 ることが必要であろう。ミルを倫理、または っと当時の市民社会の問題性について検討す 点は問題である。こういう点については、も 功利主義を正面から扱っていながら、 ルジョア性について全く触れていないような **が究書を併読することが望ましい。たとえば好など多方面にわたっているので、各分野の** 学など多方面にわたっているので、 のではなく、 ただしミルの思想はもちろんこれに尽きるも を寄せる人には一層興味あるものであろう。 についてある程度の知識をもち倫理学に関心 明をあて問題の所在を示しているので、 書というだけではなく、 こなわれている。この書は、ミル研究の入門 そしてさらに第五章においてミルの宗教に いて解明、第六章において文献の紹介がお 経済学、政治学、 倫理学の立場から照 社会学、 ルの影響 そのブ 論理 : IV

刊・新書版・一五七ページ・二五〇円)服を期待したい。(牧書店・一九六四年五月が今日でも大きいだけに、根本的な批判、克

一白井

菊地昌典著

『ロシア農奴解放の研究 ツァーリズムの危機と ブルジョア的改革』

いことである。れたことは、我が国学界にとって実に喜ばしよってロシア農奴解放の専門的研究が発表さ 増田富寿氏の先駆的労作によって行われてき たに過ぎない。 あり、ロシア経済史の研究は、小林良正氏や 国経済史研究が西ヨーロッパに限られ勝ちで でいるといわねばならない。従来我が国の外 社会主義体制にまで到ったことを考えると、 ロシアの農奴解放は実に多様な問題点を含ん の二月革命、一〇月革命を生起せしめ、現在の 程が、一九〇五年の革命を経て、 有名である。 農奴解放令は、ロシア近代化の第一歩として 一八六一年三月五日に発布されたロシア 特にその後のロシア近代化の過 その意味で今回菊地昌典氏に 一九一七年 Ø

> それと略一致している。 備えていたとしている。このような著者の立 う意味で、 の資本主義的発展が急速に開始せられたとい とみると共に、この改革の結果、 によって行われた上からの反動的改革である 立場の双方を戒めている。 価からこの解放を無条件に肯定しようという 不徹底性から農奴解放の歴史的意義を全面的 に否定する立場や、 の概観に当てられている。 ヴェ ところで本書の第一章は、 農奴解放があくまでツァーリズムの主導 ロシア革命の偉大な指導者レーニン ト及びヨー 解放はブルジョア的性格をも兼ね ロッパ 農奴解放の人道主義的評 ・アメリカの研究史 そして農奴解放の そして著者自身 従来のロシア ロシア独特 Ø

章以下の極めて実証的分析を展開する。 富な史料や基礎的文献を渉猟した結果、第二 さて著者は以上の基本的立場に立って、 豊

がそれである。 国際的=国内的契機」、 営の実態と 矛盾-第二章「農奴解放の歴史的前提 第五章 「農奴解放の実施過程」 第四章「農奴解放の 第三章「農奴解放の - 領主経

浮き彫りにした上で、十九世紀半ばの農奴制た特権的閉鎖的世襲貴族の農奴支配の実体を 第二章においては、 農奴解放の主体であっ